

かわら版

(新春 NO 16 号) 2019/01/01 発行

年二回発行(1・7月)

下関市立大学落語研究会OB会発行

大学同窓会のご厚意により創刊号(NO1)よりすべて閲覧できます。大学OBの皆様にもお読みいただければ幸いです。

編集長 西川 隆喜

戦(いくさ)なく 三十路過ぎ去り平成の

御代(みよ)の終わりに何をか思ふ (NO8, 591)

(直訳) 日本は戦に巻き込まれることもなく、平成の御代が終わろうとしている。さてさて、この国の人々はそれぞれどのような時代であったと考えているのであろうか?



日清講和記念館



JR下関駅イルミネーション

『謹んで新春のお慶びを申し上げます』

下関市立大学落語研究会 OB・OG、ご家族の皆様へ謹んで新春のお慶びを申し上げます。昨年は、米国をはじめヨーロッパ諸国や中国等、世界はそれまでの協調路線から自国中心の孤立化路線への転換が見えてきました。特に年末には日本が国際捕鯨条約からの脱退を表明したことには私も驚かされました。戦後、国際的に日本は辛抱を重ねることにより一定の評価を得てきましたが、この離

脱は少し乱暴な気がします。大学のある下関は安倍首相、また、和歌山の太地町は自民党二階幹事長の選挙区であり、政治力が強く働いたのではないかと危惧している次第です。かつて、国際連盟を「日本は国際連盟の協調の努力の限界を超えた」と表明し総会を脱退した、時の全権大使、松岡 洋右（ようすけ）はくしくも山口県人であったことを考えると、イノシシ年の今年も個人的にも少し慎重に何事も進めるようにするのがよいと考えるのは編集長だけだろうか？いずれにせよ、皆さまの益々のご発展をお祈りするものである。（編集局）

『2018 年後半の近況報告』

皆様、新年明けましておめでとうございます。

私は昨年 11 月で 67 歳になりましたが、やはり外見はそれなりの「爺さん」になったようです。先日、通勤途中の JR・山手線で 50 歳代前半と思われる女性から席を譲られました。初めての経験で反射的に固辞したものの相手も譲らなかつたので、「俺もついに爺さんの仲間入りかぁ…」とその厚意に甘えた自分がおりました。

さて、昨年後半のトピックスは、①7 月下旬の実母法事、②8 月下旬のハワイ旅行、③10 月中旬の四国旅行、④12 月上旬のラジオ生出演です。

先ず、①の 91 歳で逝ってしまった実母の 1 周忌ですが、これにまつわる昨年の不思議な出来事を 2 件報告します。一つ目は実母が亡くなった日が 10 ヶ月以上前に予定していた帰省日の最終日だったという偶然です。二つ目は、その日が私の親元近くに住んでいた中学同級生の仲介で中学 2 年時に非常に親しかったものの進路の違いで 20 歳頃から疎遠となり記憶の外だったクラスメートと電話でつながった日でもありました。彼は神奈川県在住で勤務先が私と同じ東京の港区だと分かり、今では半世紀近い空白を埋め合わせるかのように、その後見つかった 2 年 14 組のクラスメートを入れた 3 人で 2～3 ヶ月に 1 回のペースで「…ちゃ」「…ちよる」「…ほ」「…のお」の下関弁を駆使して飲んでます。これらは偶然？それとも運命？

次に②は家内、娘、息子家族を引き連れての 7 人でのハワイ旅行です。ハワイは今回で 9 回目（ちょっと自慢してます）ですが、運悪く 20 数年振りのハリケーン直撃でレストランのほとんどが休店になるなど散々な旅行でした。しかし、5 歳と 2 歳の孫とのコネクティングルームを目一杯使った無心な遊びは一番の思い出でしたね。

旅行の話ばかりで恐縮ですが③は四国旅行です。家内の姉夫婦との 4 人旅を還暦過ぎからスタートさせ、6 回目となる今回は「京都・八幡市⇒しまなみ海道⇒松山⇒高知⇒丸亀⇒高松⇒小豆島⇒（明石海峡大橋の下をフェリー）⇒神戸

しかし、見渡すところ 私たちより ご年配。でも楽しみに来られたんでしょ
う、暑いなかわざわざ学生の落語を聞きに来られるんですから。(談話室の中は
冷房がきいてました)

6月の長府庭園寄席や 田中絹代会館寄席など 学外で寄席活動をしてるので
何度も見に来られてる“おっかけ”らしきお客さんもいました。

演目は ①あばら家見死眼(みしがん) 「看板のビン」

②春好亭魔露(まろ) 「動物園」 ③あばら家芽依(さつき) 「麻のれん」

④あばら家桜青(かるびす) 「ろくろっ首」

⑤花見亭白髪男(さんた) 「親の顔」 ⑥春好亭白支「カマ手本忠臣蔵」

⑦あばら家扇太(ふぁんた) 「お菊の皿」

このあたりで4:00をまわってました。けっこう壱が長い。

⑧大喜利 6人の賢そうなイケメン boys、真面目に大喜利に取り組んでま
した。私は ばあちゃんの心境になって ほほえましく感じました。

⑨春好亭厚顔(こうがん) 「禁酒番屋」 ⑩花見亭制欲(おきなん) 「子ほめ」

⑪春好亭叫(ほえーる) 「犬の目」

終わったのは5:30過ぎ。少々退屈しましたが 一生懸命さは伝わってき
ました。楽しんで落研続けてくれたら嬉しいな~と思います。

追伸・・・1月13日(日)下関生涯学習プラザで「第一回落語まつり」があり
ます。そこに市大の春好亭叫が出演します。

お時間あえば、一緒に いってみませんか？

(編集局下関支部)

花見亭 たゆう (千葉里美)

『懐かしい友と大阪で再会を果たす！』

10月半ば「佐大の阿修羅(あしゅら)です!・・・」といきなり自宅の固定
電話に電話が入った。要件は所用で
明日、堺に行くので会いたいとのこ
とで、

20日の夜、難波で会うことにした。

彼とは昭和60年に東京の私の社宅
に、家族がお正月に遊びに来て以来
32年振りの再会であった。賀状のや
りとりだけで長い年月を経てしまっ
たが、会えばお互い学生時代に戻り
話の尽きることはなかった。彼は今
しばらく働くとのことであった。



(左：阿修羅こと山田清隆 右：編集長)

『編集後記』

元気だけが取り柄の編集局長も、今年は体の具合が悪くなり、病院通いが続き、一時は大学病院まで検査に出かける始末で、3ヶ月に一度の血液検査は必須となってしまった。不健康な先輩諸氏を他人事と思っていたが、人事ではなくなってきたようだ。母は88歳で健在だが、父は67歳で亡くなった。今頃は人生100歳とか国も言っているが、「病院で薬漬けになっても、命を存（ながら）えたい」とは私自身、全く思わない。歳をとり人から疎んじられることはなおさら嫌である。残された有益な限られた時間を、世のため人のために尽くしたいと強く感じる今日この頃である。

(編集局長)